

レポーター：ずいぶん華やか三輪車ですね。これはどういったものなんですか。

学芸員：はい、これはバングラデシュのリキシャです。

レポーター：バングラデシュ。

学芸員：はい。

レポーター：普段使われているんですか、バングラデシュの方が。

学芸員：これはばりばり使われていますね。

レポーター：えー、町中で普通に。

学芸員：町中で普通に。ふつうに、使われていますね。

レポーター：タクシーの代わりにみんな利用するような感じですか。

学芸員：そうなんですよ、日本のタクシーみたいな感じですね。

レポーター：えー、バングラデシュはそういった文化が多いというか。

学芸員：なんかですね、今はもちろん、タクシーで移動したりするんですけど、いろいろ町中の移動手段というのがあって、タクシーとかこういったリキシャ、これはもう人力ですよ。あるいはバイクにくっついてるやつ。オートリキシャとかです。もちろん、これは人力なのでとても安いんですね。庶民の足なんです。

レポーター：ちなみに日本円にすると。

学芸員：待ってました。ちゃんとそれ、調べてきてました。

レポーター：ありがとうございます。

学芸員：それはね、だいたい、一番近いところで、30 タカらしいですね。

レポーター：30 タカ。

学芸員：30 タカ。はい、30 タカです。

レポーター：わからない。30 タカ。

学芸員：タカです、はい。

レポーター：円じゃなくて。

学芸員：はい、もちろんバングラデシュですからね。30 タカです。乗れます。

レポーター：円にすると、どれくらいになるんですか。

学芸員：円にするとですね。だいたい30 円くらいですかね。

レポーター：えー、一番近くてワンメーターっていういい方があるのかわからないんですけど、どれくらいの距離で30 円でいける。

学芸員：なんかですね、実は先日バングラデシュに行ってきた子がいて、ちょっと聞いたんですね。そしたら、ここのアジア美術館から天神まで行くのに、んー、50 タカかなって言われましたね。

レポーター：50 タカっていうことは、50 円。

学芸員：50 円。

レポーター：えー、めっちゃめっちゃ安いんですね。

学芸員：でもそれで実はかなり最近、価格が上がっているそうです。

レポーター：へえー。

学芸員：上がって 50 タカ。だけど交渉次第によっては、だって料金って決まってないので、運転する人に乗る前に交渉するんですね。天神まで行くよって。いくらって。じゃあ、50 タカ。ふーん、30 で。って行って交渉して、何かオッケーが出れば、30 タカでも乗れます。

レポーター：えー楽しいですね。その交渉するのも。

学芸員：楽しいですね。

レポーター：まさかこんな華やかなリキシャが街中を走っているというわけではないですよ。

学芸員：走っているんですよ。

レポーター：えっ。

学芸員：おとなしいのは日本だけですね。アジアの国に行ったらだいたい結構いろんな乗り物が、派手な乗り物があって、バングラデシュのリキシャというのもそのなかなか派手な部類には入りますね。

レポーター：えー、これを特にお祭り用というわけではなく。

学芸員：普段ですね、普段乗りです。

レポーター：そうなんですね。

学芸員：そうですね。

レポーター：結構綺麗に、絵が描かれているんですけど。

学芸員：そうなんですよ。実は、これアジア美術館の所蔵品になっているんですけど。作品、まあ美術の作品というよりは、ほんとに普段使われている美術的なものなんですよ。

レポーター：ふうーん。

学芸員：でも、これ作るのに、すごくやっぱり時間がかかって。このリキシャの職人さんが何人かで塗っていつたりするのとか。絵を描く職人さんというのはまた別々だったりするんです。人気のあるね、職人さんのリキシャだとなかなかすぐに注文できなかつたりとか。手作業で作っていますからね。

レポーター：そうですねー。なんかこうブランドじゃないけど、そういうものもあるのかなというところですよ。実際こういうのって、素材は何で作られているんですか。

学芸員：材料はまあ、ビニール。

レポーター：ビニール。

学芸員：とか、あとは普通の、ペンキとかエナメル樹脂ですね。で、描かれています。ただなんかですね、結構、装飾はきらびやかというのは基本なんですけど、ここ

とか見ていただいたりすると、その時の例えば有名な映画スターとか。この描いている人はとてもね、動物の絵を描くのが上手いんですよね。なので、ここのシートの所とかも、見て頂くと、虎とか、なんかオオカミとか、ライオンとかそんな人たちがなんかこう、いろんなことをしてるんです。

レポーター：あの虎とか、ライオンとかは、そういうシートを張っているわけではなくて。

学芸員：いえ、全部手描きです。

レポーター：えっ

学芸員：はい。

レポーター：この下のお花の絵とかも手描きなんですか。

学芸員：もちろん、手描きです。

レポーター：すごいですね。

学芸員：すべてマニュアルなんですよ。

レポーター：えー。

学芸員：ここもシールとかも。もちろん、シールもあるんですけど。なんか描いている模様のものは、鳥とか、それは全部手描きになります。

レポーター：そうなんですか。私、てっきりプリントだと思ってました。もちろんこの、この部分なんていうんですかね。

学芸員：何でしょうね。

レポーター：ここの部分とかは、手描きでしてるんだなっていうのはわかったんですけど。

学芸員：実はその中のところがですね。特にこの動物の絵を描くこの人がとてもすごく愛らしくって。また、結構いろんなもの描いてるんですよ。それが、とても優れているので、アジア美術館で是非、是非収蔵作品にしたいということで。実際これはですね。この描く人が、福岡にやってきて、福岡市美術館の風景と一緒に、動物の絵を描いているんです。

レポーター：えー。

学芸員：なので後ろにもあと絵があるので。

レポーター：はい。ちょっと、見てもいいですか。

学芸員：こことか。

レポーター：あ、ほんとだ。

学芸員：ね。

レポーター：ウサギのオブジェありますね、美術館に。

学芸員：で、多分ここは、ひょっとして、公園で歌っている人がいたのかも、しれない。

レポーター：福岡タワー描いてある。

学芸員：描いてる。描いてる。は一い。

レポーター：うわあっ。私。

学芸員：大濠公園です。完全に。

レポーター：ですよね。はあ〜。実際にきて、描いて頂いたものを今ここ。アジア美術館に展示しているんですね。

学芸員：そうなんです。あと、うちのところには他に2つあって、全部で3台。あるんですね。

レポーター：3台もあるんですか。

学芸員：3台あるんですね。なので、どうですか1台ぐらい。

レポーター：あー、もう家にとということですか。あ、え、結構です。遠慮しときます。

実際にこのリキシャ乗ることができるんですね。

学芸員：はい、乗りますか。

レポーター：え、いいんですか。じゃあ、私は後ろに、乗りますね。

学芸員：えっと、乗りましょうか。

レポーター：おじゃまします。このリキシャって実際何人乗れるんですか。

学芸員：これ、何人乗れると思いますか。

レポーター：んーとあと1人くらいなんで。後ろに2人。乗れると思います。

学芸員：そうですよね。普通で考えるとそうですよね。だけど聞くところによると5人までいけるそうです。

レポーター：5人。

学芸員：はい。

レポーター：後ろに5人ということですか。

学芸員：後ろに5人ですね。

レポーター：えーえっ、絶対無理ですね。

学芸員：すごいですね。乗るのも大変ですけど、これ漕ぐのもすごい大変ですね。

レポーター：はい。

学芸員：今何キロくらいありますか。まあ、うん十キロだとして。5人いるとして、300キロ近くになるわけですね。それを止まっている瞬間からぐっと漕ぐ大変さ。しかも、これは若い人だけではなくって、運転手はですね、結構おじいちゃんとかも、ベテランの運転手とかもいるんですね。そうすると、おじちゃんも、さすがに5人はきつついでしょうね。

レポーター：5人も乗れるなんて驚きです。

学芸員：そうですよね。

学芸員：普段はこのホロの部分は、だいたい後ろに倒されているんです。それで、こ

のホロがくるのは、すごく日が暑い時、とか、雨の時、とか、あるいは今のよう
に、女性が1人で乗っている時とかに、ホロをばあってかぶせるんです。

レポーター：へえー。

学芸員：なぜだと思いますか。

レポーター：女性が一人乗っているときですか。

学芸員：うん。はい。

レポーター：何ですか。

学芸員：それはね、何かね。男の人とかから見られるのを、こう防ぐために。ときど
き、1人で女の人に乗ると、ばあってかぶされたり。されるんですよ。

レポーター：そういう文化があるんですね。

学芸員：でもせっかくこう、普段ビニールとかは付いていないので、街を走っている
やつは。

レポーター：ああ、そうなんですね。ほんとはこのクッションの上に直接、座る。

学芸員：座る。

レポーター：クッションが柔らかくてとても座り心地がいいんです。

学芸員：そうなんです。なので、普段乗っているリキシャっていうのは、せっかくこ
ういう絵が描いても、やっぱり使っていくうちに、どうしても剥げていったりとか、
あと街の排気ガスとかに汚れていってしまうんですよ。だから、こういう風にき
れいな形が残っているというのは、まあ、あんまりないんですけども。

レポーター：ふうーん。そうなんですね。こう実際普段乗れないリキシャに実際に来
て乗れるっていうのはとっても楽しいですよ。

学芸員：ね。ほんとはなんか、こういう歯止めしてますけど、うわあーってね乗れた
らすごい楽しいんですけどもね。

レポーター：いつかそういった機会を作ってください。

学芸員：はい。

レポーター：よろしくお願ひします。ありがとうございました。

学芸員：はい、どうも。